



ヨーロッパ平和研究所訪問記

五十嵐 暁郎
(立教大学法学部教授)

昨年(2002年)の12月初め、私の国際センター長としての出張と法学部・高原明生氏の出張のタイミングが合ったこともあり、新潟国際情報大学で学術フロンティアメンバーの佐々木寛氏と3名でヨーロッパの平和研究所を訪問しました。佐々木氏は北欧の平和研究所に詳しく、「水先案内」をお願いしました。

新しい安全保障論(平和論)を模索している安全保障グループは、かねてから先進的な活動と発信を行っている北欧などのヨーロッパの平和研究所に関心を持っていました。今回、研究奨励助成金などを利用して訪問することにしました。

ストックホルム国際平和研究所(Stockholm Peace Research Institute SIPRI)

ストックホルムの空港へ到着すると、午後の4時なのに日はとっぴりと暮れていました。駅から外へ出ると寒気が襲い、駅前のホテルまで雪道の上をゴロゴロと荷物を引かなければならない状態でした。深夜に佐々木、高原のお二人が到着し、翌朝タクシーでSIPRIへ向かいました。20分ほど走り、閑静な地域の一角にSIPRIの瀟洒な建物はありました。

SIPRIは1966年にユネスコの勧告によって創設された国立の研究所です。国会に属しているものの、所長を含め、約50人の所員のなかに外国籍の研究者も少なくありません。ここでは、平和研究についてのモノグラフの刊行、セミナーの開催などの活動を行っており、特に有名なのは、1968年以来、毎年、安全保障の現状、各国の軍事費、兵器の貿易、軍縮条約など基本的なデータを掲載した年鑑、World Armaments and Disarmamentを発行していることで、そのデータは信頼性があり、平和研究、国際政治研究で広く用いられています。

SIPRIでは所長代理のChrister Ahlstromさん他に研究所の現状を説明していただきました。SIPRIでは10年前からヨーロッパの安全保障にフォーカスして冷戦終焉後の状況に対応することに主眼

を置いていること、理論的なレベルでは、Human Securityや Information Security に関心を強めているとのこと。ヨーロッパの安全保障を考える際に、長い間東西両陣営に分かれて対立していただけに、信頼の醸成が重要ですが、一方で文化的な一体性が理解を容易にしている面もあり、そのところがアジアにおける ARF との違いではないかということでした。しかしまた、経済的な関係においてはアジアのほうが盛んであるという面も指摘されました。

SIPRI を辞してストックホルム大学へ向い、同大学の Center for Pacific Asia Studies 所長をつとめておられる池上雅子さんとファカルティーハウスで昼食を取りながら、こちらの平和研究についてうかがいました。昼食後、池上さんがアレンジしてくださったセミナーで高原、佐々木、五十嵐の3名が報告し、それをめぐって意見交換をしました。

国際平和研究所・オスロ(International Peace Reseach Institute, Oslo PRIO)

ストックホルムでオランダのクリンゲンタール研究所へ向う高原さんと別れ、佐々木さんと私はオスロへ向いました。PRIO は平和研究の「元祖」ともいべき研究所で、ノルウェーの平和研究の伝統を基礎にして、1959年に設立されました。この研究所も当初から国際的な活動をめざしています。

駅ビルの中にあるホテルからタクシーで 20 分ほど行くと、大きな公園の前の閑静な住宅地の中に PRIO がありました。Information director の Agenete Schjonsby さんが 3 階建ての少々古くなった館内を案内し、研究所の活動を紹介してくださいました。現在は、冷戦後、国家間の紛争に代わって頻発している内戦の研究に注目し、まず理論的な研究を行なっているということでした。「なぜ、どのようにして内戦が起こるのか、なぜ長引くのか、その平和的な解決は？」というのが基本的な課題で、Conditions of War and Peace Programme, Foreign and Security Policies Programme, Ethics, Norms and Identities Programme, Conflict Resolution and Peacebuilding Programme の共同研究グループが活動しています。それぞれのグループは 5~10 人の研究者、数人の助手と大学院生によって構成されており、それぞれいくつかの具体的な研究テーマを持っています。

PRIO から空港へ向かう途中、オスロ駅のプラットフォームを歩いていると、偶然にも平和研究の第一人者であるヨハン・ガルトゥングに出会いました。かつて中央大学に招かれていたガルトゥングと顔見知りだった佐々木さんが「発見」したもので、思いもかけぬことに喜び、空港までの列車の中で 30 分あまりヨーロッパの平和研究の現状を聞くことができました。各研究所の「内情」にも立ち入った話で興味は尽きませんでした。最後に、立教大学で学術フロンティアなどのために講演をお願いしたところ快諾を得ました。近いうちに皆様にご案内を差し上げることができればと思っております。

グローバル化する東南アジアの農業社会変容と地域分化

2002年11月1日～2日

立教大学太刀川記念館3階多目的ホール

立教大学アジア地域研究所主催の国際会議が、2002年11月1日から2日にかけての2日間、本学太刀川記念館3階多目的ホールで開催された。会議のテーマは「グローバル化する東南アジアの農業社会変容と地域分化」で、会議の参加者は、東南アジア諸国を中心に海外から招聘した9人の地域研究専門家と、国内他大学の東南アジア研究者9人、本学の地域研究者（全員が当研究所の所員・研究員・準研究員）11人からなる合計29人であった。このうち20人が報告し、9人が会議パネルの司会者もしくは報告に対するコメンテーターの役割を担った。この他に会議テーマに関心をもちた一般参加者が29人もみられ、かなりの盛況であった。

東南アジアの国々は、戦前から基本的に農民社会（peasant society）と捉えられ、久しく「停滞的」といわれてきた。その結果、われわれの多くが東南アジア農村に対して停滞的という印象を強く植え付けられてきた。しかし、植民地支配から独立した後、各国政府は近代化政策を積極的に推進、1960年代末から「緑の革命」が始まり、70年代後半から農業商業化が農村全体を大きな変化過程に巻き込み、1980年代末からは目覚ましい高度経済成長を達成、1990年代には「アジア経済の奇跡」「世界の成長点」とまで呼ばれて世界中の注目を浴びるまでになった。かくして東南アジアの農業と農村は、すでに大きな変化、変動を遂げ、さらなる変化を続けている。

会議の趣旨は、東南アジアの農業社会変容とそれに伴う地域分化のパターンと方向を確認し、その基本的性格に迫ろうとするものであった。農業社会変容という農村社会だけが対象のような印

象を与えるが、もともと農業社会が中心であったわけであるから、農村階層分化はもとより都市化など、事実上、社会全体の変化が視野に入る。地域分化とはそうした社会変化が地域へ投影された姿であるから、ここには労働力移動から環境劣化まで課題は多岐に及ぶ。事実、会議報告要旨が集った段階で論点を整理すると、主要テーマとして、農業社会変容の歴史的展望、近代化過程、商業化のインパクト、都市化とその影響、土地利用集約化、それに変化の方向など6つのサブ・テーマが浮かび上がり、それぞれを共通テーマとして1から6までのパネルを設定した。

報告それぞれの詳しい内容はプロシーディングスを読んでいただくとして、会議全体を通して何がいて今後何が残されたと考えられるかという点を以下に述べてみよう。

第1に、パネル1で報告者が等しく強調したように、東南アジアの農村社会は植民地列強の利害に合うように政策的強要をうけていること、そのイメージは植民地行政官により人為的に「創造」されてきたこと、停滞といわれてきた時期にも植民地政策の影響を強く受けて大きく変化していること、である。したがって、1960年代の東南アジア農村でわれわれが目当たりしたのは、植民地期に大きく変容した後の農民であり、農民社会であったと理解する必要がある。

第2に、1970年代以降の農業社会変容は、基本的に「緑の革命」とその後の農業商業化を契機とするものであった。東南アジア農村の農業技術はこの時に大幅に近代化し、米生産の飛躍的増大をみた。その限りで農業近代化は成功裏に進んだ。しかし、それは耕作農民の生活水準を改善するものではなかった。むしろ、農業商業化は生産物と同時に生産過程の商業化を加速して、農村部に農業資材・サービス市場を形成、非農業部門に新たなビジネス・チャンスを大量に創出した。それに上手く反応した米穀商・金融業者が大成功を収め、田舎町の商店街に君臨した。村で豊かになった農民もみられるが、彼らの多くは不耕作農民で、農



国際会議第2日目の光景

業は契約労働者に任せて自分は商売など非農業活動に精を出すものである。農業と非農業部門間の格差は決定的なまで拡大したが、これは農業政策がもたらパワー・エリート側の策定したもので、農民側からではなかったことによる。

第3に、近代化政策は、人口圧力も手伝って、農村住民を大量に農村地域から排除した。大多数は雇用を求めて都市に向かった。しかし、工業化がそれほど進んでいない都市には十分な雇用機会はなく、多数の都市流入者がスクオッター集落に住み着き、インフォーマルセクターに就労するほかなかった。別のものは耕作する土地を求めて山地部に向かった。彼らがそこに見つけたのは広大な商業伐採跡地の二次林で、そこに住み着いて焼畑耕作を行った。これが森林後退、土壌浸食、地下水枯渇など、山地部の環境劣化要因の一つとなった。

こうした状況のなかで、東南アジアの農村経済は、所得の源泉を農業部門から非農業部門に移行ないし拡大した。変化の方向は紛れもなく非農業セクターに向かっている。その限りで、東南アジアの農業変化は脱農業社会化 de-agrarianization といえるかも知れない。しかし、同じことは先進工業地域の農業社会についても認められる。とすると、現在進行中の変化は、先進工業国の場合と同じ近代化社会への一過程であるのか、という疑問が出てくる。東南アジア農村社会変容の基本的性格に迫るには、少なくとも次の三つの局面で研究を継続する必要があると考えられる。第1に、

農村実態調査の継続である。それによって調査事例を追加すると同時に、われわれの東南アジア農村理解が一段と深まるであろう。第2に、国家レベルでの近代化過程に関する東南アジア諸国と先進工業国との比較研究の必要性である。これにより両者の間の差異が確認できれば、現在の東南アジアの農村社会変化は先進工業国のものとは別のものと判断される。第3に、現在進行中の農村変化の性格を明らかにするには、理論レベルで「農業問題」研究の継続が必要である。東南アジアの現状解釈においてこの点は欠かせない重要性をもつ。(梅原 弘光 / アジア地域研究所所長)

報告

02

公開研究会

ガンダーラと奈良における 大乘美術の比較

マキン・ハーン氏（国際交流基金招聘研究員、パキスタン考古局クエッタ支局）

2002年12月6日

立教大学12号館第3会議室

ともすればインドの影にかくれて精彩を欠きがちなパキスタンであるが、昨今はことに、アフガニスタン問題とのからみで注目されるようになったのは皮肉である。しかしパキスタンは、インドにまさるとも劣らない文化史上も重要な地であり、その遺産のひとつが、日本にまで大きな影響を及ぼしたガンダーラ文化である。いうまでもなく、パキスタン北西部の一角ガンダーラ・スワート地方を中心として興ったこの文化は、仏像の起源に大きな役割を果たし、かつ大乘教義の源流の地ともされている。

パキスタン政府考古局に籍を置くマキン・ハーン氏は同文化ゆかりの地であるスワート地方（玄奘三蔵も訪れた古代のウディヤーナ）に生まれ育ち、同地方の考古学研究に従事してきたが、このたび国際交流基金の招聘により来日し、立教大学において、「大乘美術」という観点からガンダーラ

と奈良の美術の比較研究を行なった。その成果は、必ずしも「比較」という点でよい結果が出せたかどうかには問題は残すが、約6ヵ月にわたる滞在中、奈良・京都の博物館や諸寺の見学ができたこと、また名古屋・京都等で美術史学者の指導を受け得たことは氏自身にとっての大きな成果であったことであろう。

そしてこのたび、研究期間も終わりに近づいたということで、この機会に上記の主題で、アジア地域研究所の公開研究会を開催することとした。講演はスライドを用いつつ英語で行なわれ、参加者の希望によって、急遽、小西所員が通訳をした。学外からの熱心な参加者が多数来校されたが、そのさいの様子は、テープ起こしをしたうえで当研究所の「ワ・キング・ペーパー」としてまとめる予定である。(小西 正捷/アジア地域研究所所員)

報告

03

公開公演・講演会

視覚で語る・化粧 歌舞伎舞踊・中国京劇

村澤 博人 氏(本学非常勤講師)

岡部 礼子 氏(メイクアップ・アーティスト)

西川 箕乃助 氏(歌舞伎舞踊西川流、本学非常勤講師)

張 紹成 氏(中国京劇芸術社代表、本学非常勤講師)

2002年12月6日

立教大学 12号館第3会議室

私たちは、言葉や文字によらない情報交換手段の一つとして、視覚表現をもつ。今回は、そうした視覚表現のなかから、日常生活においても身近な化粧に焦点をあてた。化粧が果たす情報交換は、どう見せたいか、見られたいか、という個人レベルのものから、風俗習慣などの社会的レベルのものまでをカバーする。どのレベルであっても情報交換手段として機能するためには、視覚表現を意味に、あるいは意味を視覚表現に置き換える作業が不可欠であり、情報の発信者と受信者の間で、置換(翻訳)コードを共有していなければ成立しない。このコードが、いわゆる文化である。した

がって化粧は、発信・受信間で文化圏が異なるとか、同じ文化圏であっても時代によるコード変化などで、誤訳(誤解)が生じるという情報交換手段なのである。こうした、なまもの的性質の化粧について、情報交換とそのコードという視点から取り上げてみようというのが、今回の企画である。公演・講演会として、表現される意味を同一(「男・若い・正義漢、少々おっちょこちょい」という人物像)にした、日常生活の化粧と舞台化粧(同じ文化圏で時代によるコード差のある歌舞伎と、異なる文化圏として中国の京劇)の実演を組み込んだ形で行った。

日本ではいまやり直しのきくプチ整形が大流行し、男性の化粧品や小学生用の化粧品までも市場に定着しようとしている。化粧は従来よりもさらに手軽な変身方法として浸透しているにもかかわらず、「化粧」とは何かを意識することが少ない。そこでまず第1部で、化粧学、化粧文化を専門とされる村澤博人氏に、「化粧」と「お化粧」の違いや化粧の分類、異なる文化圏と同じ文化圏の時代変化など、体系的な講義をいただいた。同時に、メイクアップ・アーティストの岡部礼子氏による「現代の男の化粧」の実演も並行して行われた。

岡部氏は、化粧をしていないかのようなナチュラルメイクと、もう一段階あげたメイクの2種類を実演しつつ、男の化粧の変化や具体的なテクニックなども紹介された。この時間は、頭で知識を吸収するとともに、岡部氏の手によって、モデル(経済学部2年宗平大和君)の印象が変化するの



西川氏による剥身隈のメイク実演



役どころとメイクの関係について説明する張氏

を実感できるという充実したものとなった。

続いて舞台化粧である。歌舞伎・京劇とも、化粧コードが確立しているため、表現する性は男だが、あえてモデルは女性にお願いした。第2部は歌舞伎舞踊西川流の西川箕乃助氏による剥身隈の実演（モデルは文学部2年田山由美恵さん）。続いて第3部では、中国京劇芸術社の張紹成氏による京劇の舞台化粧の実演（「生」と「丑」2つの役柄類型の化粧。前者のモデルは経済学部2年松田八重さん、後者のモデルは文学部2年蓼沼祐子さん）を行った。普段見ることのできない仕度中の楽屋に入り込んだような雰囲気のほか、化粧品の紹介、化粧のやり方やコツ、色や形がもつ意味など、実際にメイクをしながらの説明は非常に分かりやすかった。

今回は予定の2時間半を越える長い講演会になったにもかかわらず、会場の熱気は増す一方だった。しかし取り上げられたのは、視覚的情報交換手段としての化粧の面白さのさわりのみで、参加者の各講師への質疑応答時間も十分ではなく、実演に基づく比較検討にまで展開することも叶わなかった。進行について反省が残るところである。

なお、この講演会については、アジア地域研究所のワーキング・ペーパーにまとめる予定である。

（細井尚子 / アジア地域研究所所員）

報告

04

公開研究会

近現代インドにおける 「カースト」：競い合う集団範疇

藤井 毅（東京外国語大学教授）

2002年1月17日

立教大学 太刀川記念館第1会議室

インドにおける「カースト」に対する批判はさまざまな形でなされてきたが、何をもって「カースト」としているかが明確にされずに論を展開するのであれば、問題の核心から逸れてしまいかねない。講演では、この「カースト」という集団範疇を、その発生時から現在に至るまでの通時的過程で「実体化」され、構築されたものとして捉え、その系譜を明らかにすることによって、より精密な「カースト」論が可能となることが主張された。

「カースト」という語が、ポルトガル語のカスタから転じたものであることは周知のことであるが、このカスタが、ジェネロ、ジェラサン、ナシーなどといった、血統や種族を意味する一般名詞と並行して用いられていたことは知られていない。一連の一般名詞から、インド固有の社会組織、あるいは慣行を特定する語としてカスタが用いられるようになったのは、この語が、混じってはならないもの、または純血、貞操といった意味を持ち合わせていたために、オランダの「発見」したインドにおける現象、たとえば通婚や共食の制限、階層化の側面、職業の継承体などに合致したからであった。こうして固有名詞化した語を「カースト」として引き継いだイギリスは、その情報源を商人層やブラーマンに拠っていたため、「カースト」はその「実体化」の過程で大きな偏向性を孕むことになったのである。

この「実体化」の過程は、イギリスの支配制度

に拠るところが大きい。インド古典法であるダルマ・シャーストラなどに依拠して作り上げられた家族法は一生族、再生族の帰属を重視したし、軍の雇用に際しては、初期はブラーマンを、後にクシャトリアを重視した軍事適応所属論が提示されるなど、ヴァルナ意識を復興させる働きをした。また、地租査定、測量、地誌編纂、民族誌記述、国税調査などの帝国諸事業も、「カースト」概念をインド社会に浸透させる大きな役割を果たした。「不可触民」に対して優遇を行った教育制度、また、彼らに対し積極的に保護を行ったキリスト教宣教師団の活動もまた、大きな影響力を持ったものとしてあげることができる。

しかし、「カースト」の「実体化」は、ひとえに上からの一方的な政策過程でなされたものではなく、インド社会における「カースト」概念の受容と、自らの再編またはその主唱といった内側の働きかけも大きな役割を果たした。つまり競合状態の中で築き上げたものとして捉えられなければならない。たとえば、植民地支配の中で活発化した社会宗教改革運動、中でも最も影響力の高かったアーリヤ・サマージは、「ヴェーダに帰れ」をスローガンに、「生まれ決定論」から「行い決定論」へと論をシフトさせつつ、4 ヴァルナを再解釈し直して主唱したし、また、自らの集団的アイデンティティを「カースト族譜」を作成するという形で主張していく自己再編運動も多くみられた。「カースト」の上昇/下降を目論んだ様々な運動も、こうした文脈で捉えられるものであろう。

このように、「カースト」はポルトガルによって「発見」されて以来、植民地支配という状況下において相互作用の中で構築されたものとして捉えることができよう。「カースト」にまつわる問題系は多岐にわたっており、今後の包括的、かつ詳細な「カースト」研究が必要とされるであろう。

(小西公大 / 都立大大学院)

報告 05 公開講演会

イスラーム化が進むパキスタン：民主化とテロの狭間で

ホットな、パキスタンの現状と問題点を明らかにする

廣瀬 崇子 氏 (大東文化大学国際関係学部教授)

2002年2月15日

立教大学 12号館6階・法学部共同研究室

主題のとおり、パキスタンはいま、民主化とテロの狭間にゆれている。廣瀬教授によれば、パキスタンの政治は現在、3つの大きな課題を抱えているという。すなわち民政対軍政(民主化の問題)、穏健な近代的ムスリム対急進的イスラーム勢力(イスラーム化の問題)、それに中央対地方(州)の対立である。ことに2001年9月11日以降、反テロリズムを謳うアメリカに加担したパキスタンは、国内的にはこれらの課題に、急遽取り組むことを余儀なくされた。

国内政治の現状を見てみると、2002年10月の総選挙で「民主政府」が誕生したことに一応はなっている。この結果をふまえ、ムシャッラフ大統領の権限は絶大であるといえる。しかし他方では、国内のイスラーム勢力は国外の勢力との連携もあって日増しにその勢いを一段と強めており、中央政府の統制が利かなくなる恐れもある。そして最終的には、州(すなわち言語を基礎とした「民族」)が自己主張をさらに強める可能性もある。

講演者の廣瀬教授はこうした綱渡りを続けるパキスタン政治の現状と問題を明らかにしうる第一人者であり、今回もパキスタンの視察から戻られたばかりのタイミングである。年度末ということもあって参加者数はやや少なかったが、本講演は第60回アジア研究・学術フロンティア・セミナーとしての開催であったこともあって、専門の研究者による熱心な議論がかわされた。

なお本講演も、アジア研究学術フロンティア・セミナーのワーキング・ペーパーとしてまとめるべく準備中である。(小西 正捷)

研究所日誌 2002 年度後期

- | | |
|---|---|
| 10・16 第3回学術フロンティア運営委員会 | る諸問題」曹慶鍋(立教大)+水上徹男(立教大) |
| 10・16 第3回所員会議 | |
| 10・24 第4回総合研究センター委員会 | 12・18 アジア研究学術フロンティア・セミナー「スロー・イズ・ビューティフル 遅さとしての文化」:辻信一(明治学院大)+田中治彦(立教大) |
| 11・1~2 国際会議「グローバル化する東南アジアの農業社会変容と地域分化」 | |
| 11・06 アジア研究学術フロンティア・セミナー「人の移動と多民族の共生をめぐる諸問題」:Mヴィーヴィオルカ(パリ社会科学高等研究院) | 01・14 第5回学術フロンティア運営委員会 |
| 11・14 第4回学術フロンティア運営委員会 | 01・15 アジア研究学術フロンティア・セミナー「途上国のグローバリゼーション」:大野健一(政策研究大学院)+田中治彦(立教大) |
| 11・19 COEに関する特別総合研究センター委員会 | 01・17 公開研究会「現代インドにおける『カースト』:競い合う集団範疇」:藤井隆(東外大)+小西正捷(立教大) |
| 11・20 第4回所員会議 | 01・23 第5回所員会議 |
| 12・06 公開研究会「ガンダーラと奈良における大乘美術の比較」:Mハーン(パキスタン政府考古学博物館局)+小西正捷(立教大) | 01・30 臨時総合研究センター委員会 |
| 12・07 アジア地域研究所第2回公開講演・公演会「視覚で語る化粧 歌舞伎舞踊・中国京劇」村澤博人(立教大非)+西川箕乃助(日本舞踊西川流、立教大非)+張紹成(中国京劇芸術社、立教大非)+岡部礼子(メイクアップ・アーティスト) | 01・30 アジア研究学術フロンティア・セミナー「欧州グローバル教育会議報告」岩崎裕保(京都造形美大)+「欧州におけるグローバル教育の現状」田中治彦(立教大) |
| 12・12 第5回総合研究センター委員会 | 02・15 第60回アジア研究学術フロンティア・セミナー「イスラム化が進むパキスタン:民主化とテロの狭間で」廣瀬崇子(大東文化大)+小西正捷(立教大) |
| 12・17 アジア研究学術フロンティア・セミナー「ジェンダー化した政治構造の中で民主主義を語ること」R.M.ルブランク(ワシントン・リー大)+五十嵐暁郎(立教大) | 03・06 第6回学術フロンティア運営委員会 |
| 12・18 アジア研究学術フロンティア・セミナー「人の移動のグローバル化と多民族共生をめぐ | 03・06 第6回所員会議 |
| | 03・06 第6回総合研究センター委員会 |
| | 03・13~14 シンポジウム「安全保障」 |

RUCAAS News letter

立教大学アジア地域研究所ニューズレター No.10

発行日: 2003年3月31日

発行所: 立教大学アジア地域研究所

Rikkyo University Centre for Asian Area Studies

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1 ミツチエル館

Tel: 03-3985-2581

Fax: 03-3985-0279

e-mail: ajiken@rikkyo.ac.jp